3

上海の結果と分析

朱　家雄（華東師範大学学前・特殊教育学院教授）

１．幼児の生活実態

（１） 生活リズム

調査結果からみると、上海の就学前の幼児はおおむね、朝「７時頃」41.2%から「７時半頃」34.2%の間に起床する（両者合わせて75.4%、p.46 図１－１－１）。夜の就寝時刻は「21時頃」から「22時頃」に集中している。そのうち「21時頃」が29.8%、「21時半頃」が37.1%、「22時頃」が16.0%、３者合わせて82.9%である（p.48 図１－１－５）。子どもたちの夜の睡眠時間はおおむね９時間から10時間半の間で、それに加えて昼寝が１時間から２時間あり、１日の睡眠時間は10時間から12時間半である。

上海の就学前の幼児の朝食時刻は「７時半頃」が47.1%、「８時頃」が32.6%を占めており（p.47 図１－１－３）、保護者が子どもを幼児園に送るために家を出る時刻は「８時頃」が46.8%、「８時半頃」が35.2%を占めている（p.49 図１－１－７）。前述の起床時刻と合わせて考えると、子どもが着替えや洗面などを行う時間はおおむね30分で、朝食や登園準備の時間もおおむね30分だと推計できる。

（２） 習い事（興趣班）

上海の就学前教育機関における習い事は主に２種類に分けられる。１つは幼児園が通常の活動時間終了後に開設している習い事（課外興趣班）で、幼児園の教師や幼児園が外から招いた教師が教える。これにより、仕事で忙しい保護者たちが遅めの時間帯に子どもを迎えに行くことができるようになり、また、子どもに何らかの「技能」を学ばせたいという保護者のニーズを満たすことにもなる。また、幼児園が少なからぬ副収入を得ることができるという面もある。もう１つは、週末に半日や１日、あるいは平日の夜に社会教育機関がやっている習い事（興趣班）である。一般的に、そのカリキュラムは一定の連続性があり、レベルが高く、１回の学習時間も比較的長い。保護者が習い事に子どもを通わせるのは、子どもを全面的に成長させたい、小さい時に基礎をつけさせたい、他の子どもの一歩先を行かせたい、特技を身につけさせたいなどの動機、あるいは「よその子どもが通っているから自分の子どもを通わせないわけにはいかない」という横並び意識からであり、また、「友だちがみんな習い事に通っているから」と子ども自身が行くことを望むケースもある。

今回の調査結果をみると、上海の就学前の幼児の習い事への参加の全体に占める割合は78.4%で、ほぼ80%近い。習い事への参加はすでに当たり前の現象になっており、子どもが興味を持つかどうかの問題ではなくなって

いる。習い事に参加する子どもの割合は、3歳児56.1％、4歳児77.4％、5歳児89.0％、6歳児91.0％と、年齢が上がるにしたがい増える一方である（p.54 表１－２－１）。

習い事の内容をみると、上海の子どもたちの参加が多いのは、順番に、「絵画教室」49.6％、「英会話などの語学の教室」37.0％、「楽器・音楽」30.2％である（p.56 図１－２－１）。その他、2割弱から1割の子どもが計算やスイミングスクール、バレエ・リトミック、囲碁教室などの習い事に参加している。絵画教室の参加人数が最多で、約2人に1人の割合になる。このように高い割合を示したのは、単純に保護者の絵画に対する注目度が高いからだとはいえないかもしれない。これはやはり上海地区の就学前の絵画教育システムが整っていること、普及が進み、参加しやすいこと、また費用も相対的に安いことと関係があるが、さらに重要なのは絵を描くこと自体が子どもの天性に近いものなので、子どもたちが興味を抱きやすく、学習の継続がしやすいことである。

次に多いのは「英会話などの語学の教室」である。ここから上海の保護者の子どもの英語学習への注目度の高さがうかがえる。その原因を突き詰めると、1つには上海は対外交流の盛んな国際的大都市であり、外国語、とくに英語に対する要求が高く、外国語のレベルの高さが就職と直接的な関係があるという現実がある。もう1つは、ここ数年来、メディアやビジネス業界の「子どもに外国語を学ばせるのは早ければ早いほどいい」という宣伝やあおりのせいで、保護者が心を揺さぶられ、スタート時点で子どもを優位に立たせたいという焦りが存在することである。上海で最先端を行く英会話教室は外国人教師が主として教え、中国人教師が補助する教学スタイルである。というのは、外国人教師の看板を掛けると、受講料は特別に高くなり、利益も増すからである。一方、保護者は消費者として、外国人教師の教育の質に信頼をおく傾向にあって、授業料を惜しまない。また、英会話以外の語学教室は実際にとても少ないので、上海においては外国語の概念はほとんど英語とイコールなことがわかる。

注目すべきことに、「計算・かきとり教室」の参加比率は19.7％で、第4位である。しかし、第3位の「楽器・音楽」と10.5ポイントの差が開いている。予想されるほど、上海の多くの保護者が読み書きや算数を重視してはいないことになる。

年齢別にみると、「絵画教室」の参加比率は、6歳児以外の年齢において最多である（図表省略）。しかも、他の習い事の比率を大幅に上回る。「英会話などの語学の教室」の参加比率は3歳児で26.1％、5歳児まで参加率が上がって43.5％になる。6歳児で48.9％と最高になる（図表省略）。

特筆すべきは3歳児における習い事の参加の状況である。3歳児の56.1％が習い事に参加している。37.2％の子どもが「絵画教室」に参加し、26.1％が「英会話などの語学の教室」に参加している。この2種類の習い事の経営主体は異なるものである（図表省略）。「絵画教室」についていえば、その多くは幼児園が組織するもので「延長託児クラス」の性質を持つ習い事である。というのも、カリキュラム編成などの都合により、上海の正規の地域組織が経営する機関が開設する絵画の教室は一般に、4歳以上（すなわち年中クラスの年齢）の子ども向けだからである。このような習い事は普通、1週間に1回である。一方、英会話教室の状況は逆であり、子どもたちは地域組織が開設する教室に参加するのが一般的である。なぜなら、上海では英会話教室は、地域組織が初めに推進し始めたものであり、その経営システムや市場運営がいずれも比較的成熟しているからである。幼児園のこれへの参入は、多くが関連カリキュラムを幼児園の通常の教育活動のなかに組み込むか、あるいは会場を提供し、週末に開講させて、一定の仲介費用を受け取るものである。これは同時に、幼児にとっては近くに通えるという利便性もある。このタイプの習い事は

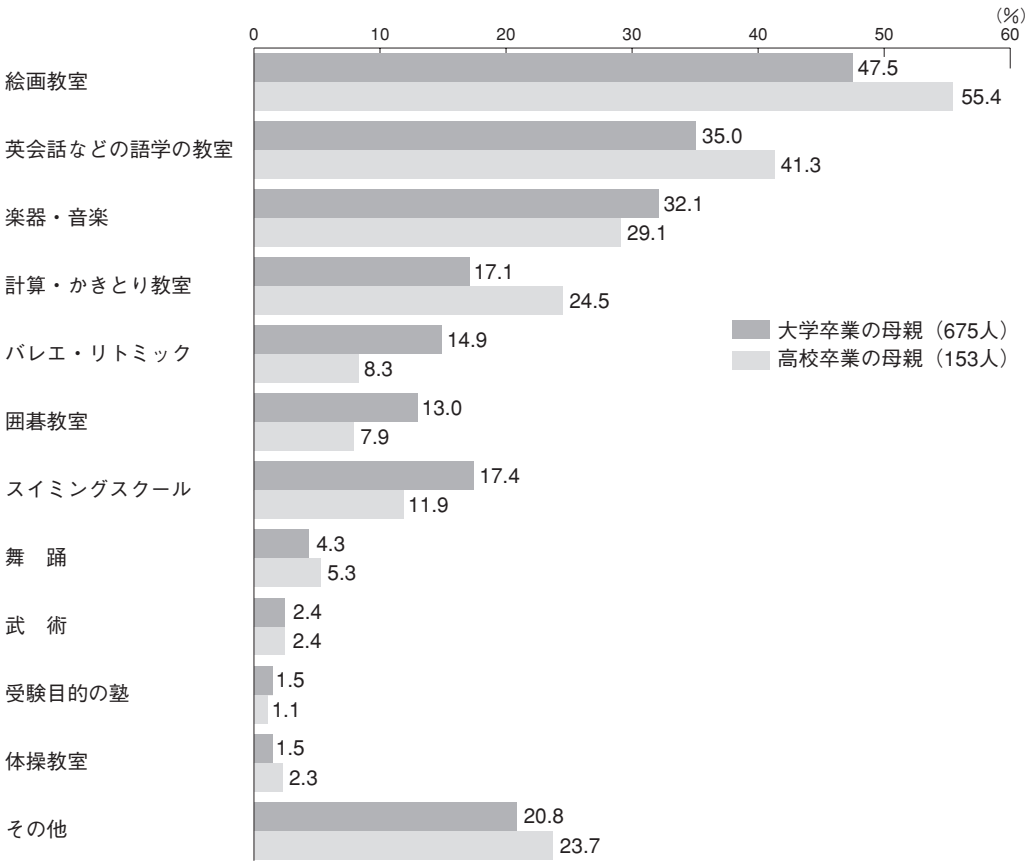
普通、１週間に２回から３回である。

母親の学歴を「中学校、高等学校、職業高等学校」（以下、「高校卒業の母親」）と「短期大学、四年制大学、大学院」（以下、「大学卒業の母親」）に分け、母親の学歴別の分析を行ってみよう。

習い事に参加している子どもの割合と母親の学歴との関係からみると（**図２**）、参加する割合が母親の学歴の高さに反比例（すなわち母親の学歴が高くなればなるほど、参加割合が低くなる）し、その差が５ポイント以上みられたのは、「絵画教室」「計算・かきとり教室」「英会話などの語学の教室」であった。「囲碁教室」「バレエ・リトミック」「スイミングスクール」の参加比率はいずれも母親の学歴の高さと正比例している。このように、母親の学歴によって習い事の選択の傾向は異なる。

このほか、「その他」の具体的な内容をみると、上海の就学前の幼児が比較的多く参加している習い事には、ほかに手芸、書道などがある。上海の就学前の幼児が習い事をしていない比率は21.6%であることがわかった。一方、北京は35.4%に達している（図表省略）。習い事を含めた１か月の子どもの教育への支出の費用では（**表２**）、上海の保護者の平均額は405元で、北京の平均額290元を大きく上回る。これは今回調査した家庭の収入水準と関係がある。調査対象の上海の家庭の平均月収は北京のそれを上回っている。しかし、こ

■図２　習い事の種類（上海　母親の学歴別）



注１）複数回答。
注２）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

れは上海の保護者のほうが習い事への参加により熱心で投資を惜しまないからだという可能性を排除するものではない。

（３）メディアとの接触

今回の調査によれば、上海の就学前の幼児が接触している割合が最も高いメディアはテレビである。「ほとんど毎日」見る子どもの比率は64.3%で、第２位の「絵本」を「ほとんど毎日」読む子どもの42.8%をはるかに上回る（p.170 基礎集計表）。しかも年齢別（３～６歳児）にみても、ほとんど変わらない（図表省略）。１日の平均テレビ視聴時間をみると、「30分未満」が2.0%、「30分～１時間未満」が23.3%、「１時間」が41.7%、「２時間」が22.1%であった（p.171 基礎集計表）。しかも、母親の学歴が高いほど、子どもにテレビを見せる時間をより厳しく制限しているという傾向があった（図表省略）。

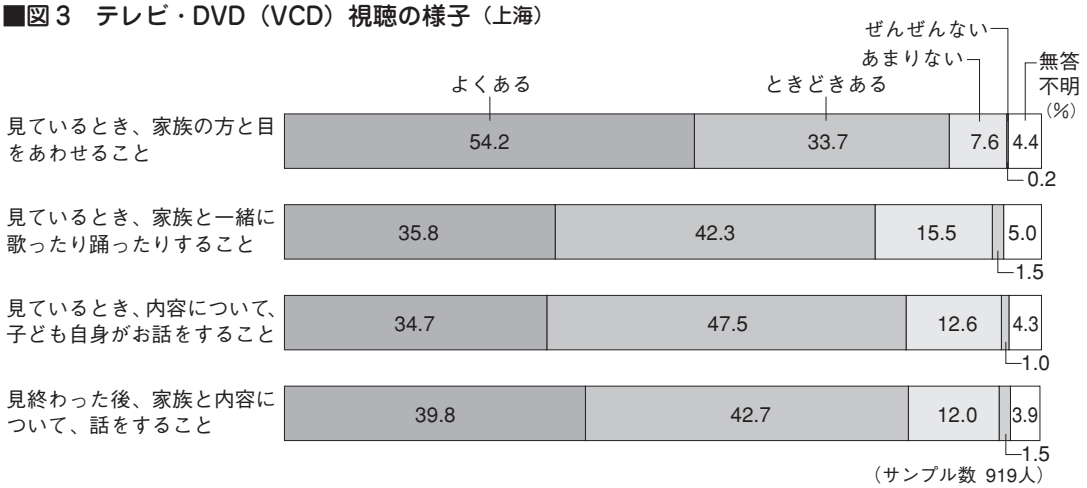
子どものテレビ番組への反応からみると（**図３**）、子どもはテレビ番組に非常に熱中し、その影響を強く受ける。テレビを「見ているとき、家族と一緒に歌ったり踊ったりする」子どもは78.1%（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）で、テレビを「見ているとき、家族の方と目をあわせること」は87.9%、「見ているとき、内容について、子ども自身がお話をすること」は82.2%であり、「見終わった後、家族と内容について、話をする

■表２　平均教育費

東京（997人）	ソウル（926人）	北京（953人）	上海（908人）	台北（2241人）
10,221円	96,478ウォン	290元	405元	3,456元

注１）平均教育費は、「1,000円未満」を500円、「1,000円～5,000円」を3,000円、「30,000円以上」を32,500円のように置き換えて算出した。また、無答不明の人は、分析から除外している。
注２）１ウォン（韓国）＝0.116円、１元（中国）=14.833円、１元（台湾）＝3.581円（2005年12月13日現在）

■図３　テレビ・DVD（VCD）視聴の様子（上海）



注）「テレビ」「DVD（VCD）」をいずれか１つでも「ほとんど毎日」「週に３～４日」「週に１～２日」「ごくたまに」見ている人のみ分析。

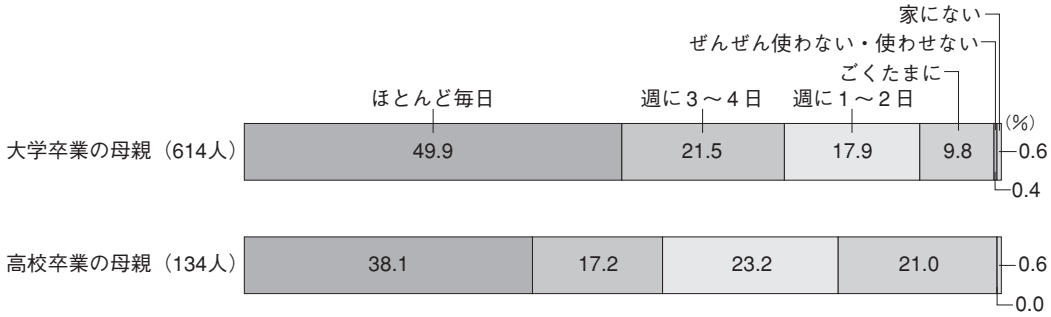
こと」は82.5%であった。

幼児向けのテレビ番組が少ない、品質もよくない、子どもがおとな向けのテレビ番組をつねに目にしているなどの現状への憂慮から、ここ数年来、数多くの学者が「子ども時代の喪失」への警鐘を鳴らし、保護者や社会に注意を呼びかけている。さらには、子ども自身に子ども番組の選出や制作にあたらせようという呼びかけさえ出ているほどだ。

伝統的な印刷メディアである絵本は、テレビとの接触頻度には及ばないが、テレビに次いでよく読まれている。上海の子どものうち、週に3～4日以上（「ほとんど毎日」＋「週に3～4日」）「絵本」を読んでいるのは61.1%である（p.170 基礎集計表）。子どもの性別にみると、「ほとんど毎日」読んでいる女子は46.7%、一方男子は39.0%で、女子が男子を7.7ポイント上回った（図表省略）。絵本との接触頻度は母親の学歴とも関係がある。母親の学歴別にみると（**図4**）、「大学卒業の母親」をもつ子どもの49.9%は「ほとんど毎日」絵本を読んでいる。一方、「高校卒業の母親」をもつ子どもは38.1%しかなかった。

上海の就学前の幼児の接触頻度が比較的高いメディアとしては、DVD（VCD）もあげられる。週に3～4日以上（「ほとんど毎日」＋「週に3～4日」、以下同様）見る幼児の比率は36.6%である（p.170 基礎集計表）。子どもの性別にみると、男子は38.0%、女子は35.1%で、男子が女子よりもDVD（VCD）との接触頻度が高い（図表省略）。さらに、調査結果から、DVD（VCD）を視聴する時間はテレビより短いこともわかった。DVD（VCD）を視聴している（「ほとんど毎日」＋「週に3～4日」＋「週に1～2日」）と回答したのは66.9%であった（p.170 基礎集計表）。また、38.8%の子どもはDVD（VCD）を見るのが1日平均1時間未満（「30分未満」＋「30分～1時間未満」）で、「1時間台」は28.7%であった（p.171 基礎集計表）。

■図4　絵本の使用頻度（上海　母親の学歴別）



注1）無答不明は除いて算出している。
注2）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

２．母親の意識

（１）子育てに関する意識

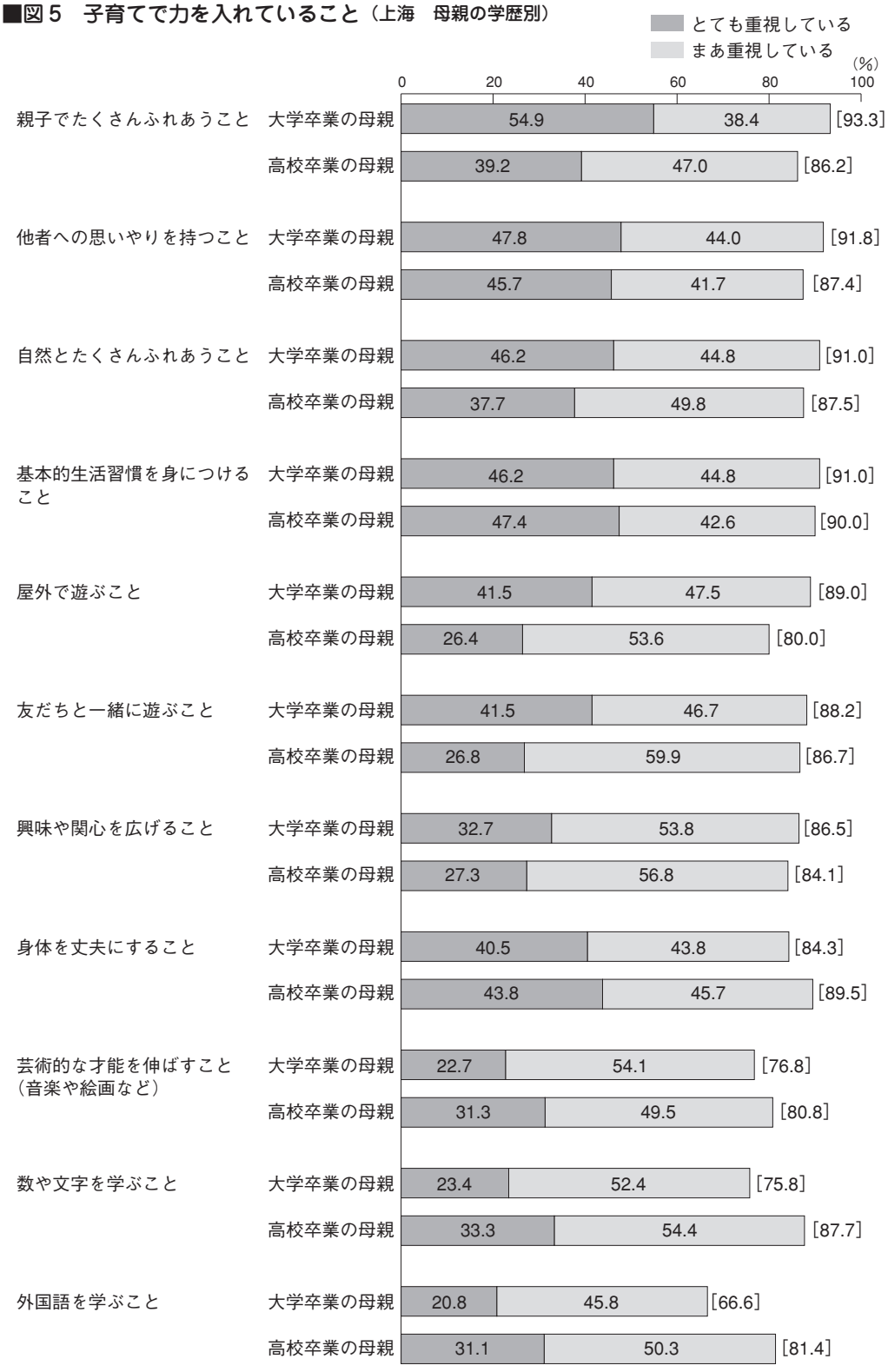
１）子育てにおいて重視すること

子育てにおいて重視していることをたずねた（p.75 表２－３－１）。保護者が重視している上位３項目は、順に「親子でたくさんふれあうこと」91.4％（「とても重視している」＋「まあ重視している」、以下同様）、「他者への思いやりを持つこと」91.2％、「基本的生活習慣を身につけること」90.5％である。それに対して、重視していない３項目は順に「外国語を学ぶこと」25.8％（「あまり重視していない」＋「ぜんぜん重視していない」、以下同様）、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽・絵画など）」18.5％、「数や文字を学ぶこと」17.0％であった（p.173 基礎集計表）。このデータは、上海の母親は「知育を非常に重視している」という、人々が抱いている印象を少し修正するのに役立つかもしれない。

母親の学歴別にみると（**図５**）、「大学卒業の母親」と「高校卒業の母親」とでは、子育てにおいて重視することが異なる。両者の差がみられた項目を取り上げて、分析を行いたい。「大学卒業の母親」が「とても重視している」比率が「高校卒業の母親」より高く10ポイント以上差がみられた項目は、「親子でたくさんふれあうこと」（15.7ポイント差）、「屋外で遊ぶこと」（15.1ポイント差）、「友だちと一緒に遊ぶこと」（14.7ポイント差）である。一方で、「高校卒業の母親」が「とても重視している」割合が「大学卒業の母親」より上回っている項目もある。上述のような項目ほど差はみられなかったが、両者に５ポイント以上差がみられた項目をあげると、「外国語を学ぶこと」（10.3ポイント差）、「数や文字を学ぶこと」（9.9ポイント差）、「芸術的な才能を伸ばすこと（音楽や絵画など）」（8.6ポイント差）がある。このことから、「高校卒業の母親」は子どもの技能の育成、知識の獲得をより重視し、一方、「大学卒業の母親」は子どもとの心の交流、子どもの社会性を伸ばすことをより重視していることがわかる。

子どもの年齢別にみてみよう。ここでたずねたほとんどの項目が、子どもの年齢が上がるにつれ、「とても重視している」と回答する比率が減少している。そのようななかで、５ポイント以上差がみられたのは「数や文字を学ぶこと」（３歳児25.0％＜６歳児30.9％）の１項目のみである（図表省略）。この現象は１つには子どもの年齢が上がるにつれ、母親が子どものエネルギーを数や文字の学習に次第に向けさせ、小学校の学習によりよく適応させ、人に遅れをとらないようにさせようと考えるからかもしれない。またもう１つには（こちらのほうがより直接的な理由かもしれない）、母親が現実に迫られてやむをえない選択をしているだけということもある。上海ではここ数年、質の高い小学校の数が保護者の良質の教育を求めるニーズに遠く追いついていない。そのために、幼児は、一部のよい小学校に入るのに選抜試験に合格しなければならない。進学から受けるプレッシャーの増大にしたがって、保護者は調整を余儀なくされ、幼児の時間を数や文字の学習により振り向けさせるしかないのである。

■図５　子育てで力を入れていること（上海　母親の学歴別）



（サンプル数 大学卒業の母親 521人、高校卒業の母親 112人）

注１）母親の回答のみ分析。
注２）[　　] 内は「とても重視している」＋「まあ重視している」の%。
注３）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

2）子どもに将来どんな人になってほしいか

将来どんな人になってほしいかたずねた(p.73 図2－2－1)。上位3位はそれぞれ「自分の家族を大切にする人」(75.7%)、「まわりから尊敬される人」(43.0%)、「仕事で能力を発揮する人」(39.0%)であった。北京の母親も「自分の家族を大切にする人」(71.8%)になってほしい比率が最高であった。少し大胆な推測になるかもしれないが、この1項目については、中国の母親にはあまり大きな異論は出てこないのではなかろうか。なぜなら、それは中国の伝統的な文化によるものであるからである。中国を2000年の長きにわたって支配してきた儒教思想の基本概念は「仁」であり、その本質的な意味は「孝弟なる者は其れ仁を為すの本か〔仁の根本は、親や年長者を敬う心(孝弟)である〕」(『論語』学而)である。それは家父長制の血縁関係から派生した倫理規範である。このため、人はまず家庭や家族の中の1人なのである。「孝」は高尚な美徳とみなされ、同時に基本的な道徳でもある。「身体髪膚これを父母に受ける、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり。身を立て道を行い名を後世に揚げて以って父母を顕わすは孝の終わりなり〔身体をむやみに損なわないようにすることが孝行の第一歩であり、出生し、立派な人物となり、自分を育ててくれた親の名を世に表すことが究極の孝行である〕」(『孝経』)ともある。孝を家族の人に及ぼすとは、つまり家族に対し責任と義務を負い、無条件に家族を大事にしなければならないということである。この伝統文化の観念は深く根づいているので、子どもに「自分の家族を大切にする人」になってほしいという割合が上海、北京ともに高いが、不思議はないのである。

一方「他人に迷惑をかけない人」という項目では、上海(4.6%)と北京(4.9%)のいずれの数値も最低であった。これも結局のところ、中国特有の文化によるものである。前述したように、中国の伝統的な文化においては人はまず家庭の中の1人、家族の中の人として存在する。家は同時にまた社会を構成する単位である。1つ1つの家が交わりつながって国家を形成する。個人もこの複雑なつながりに当たり前のように組み込まれている。個人は社会のつながりのなかにあって、単独の個体であるだけでなく、家庭の中の人であり、家族の中の人であり、社会の中の人である。人は誰もが必ず他の人と複雑な関係を持たざるをえない。つまり「人に迷惑をかける」のは必然的なことなのである。このようなつながりの過程のなかで、行ったり来たりの交流は双方向のお互いさまであって、迷惑もつまり当たり前の現象になるわけである。

3）子どもの進学に対する期待

調査結果によると、上海の母親の子どもの学歴に対する期待が大変高いことがわかる。39.0%の母親が大学卒業までの学歴を望み、56.3%の母親は大学院卒業を望んでいる。北京の母親の期待はさらに高く、24.9%が大学卒業の学歴を望み、71.5%が大学院卒業を望んでいる(p.77 図2－4－1)。昨今の中国に広く存在する極端な「学歴崇拝」現象をあらわすものである。これは中国の現有の受験体制に密接にかかわっている。高校入試から大学入試さらに大学院入試、博士課程入試まで、すべて試験に合格して進学するのであり、教育全体が入試をめぐって、入試に振り回されている。このことがもたらす暗黙の評価基準は試験に合格できた学生だけが優秀な人材であり、たくさんの入試に合格すればするほど、入試が難しければ難しいほど、その人の能力が高いことをあらわすことである。その結果は、学歴が高いほど、仕事が探しやすく、収入もより高いことになる。それに加えて、中国という人口大国においては、人材間の競争、生存をかけたプレッシャーがますます激化し、とくに、上海のような大都市においては、津々浦々からエリートたちが集まってくるので競争はさらに激烈になる。高学歴を得ることは生活の保障を得ることに等しいのである。子どもが将来の競争で確かな位置を占

めることができるように、苦労しないように、最善で最も穏当な方法は子どもに高学歴をつけさせることだ。したがって、「学歴崇拝」も母親たちの仕方がない選択なのである。

このほか、子育て観をたずねた項目で（p.71 図２－１－１⑦）、上海の母親が「世間で名の通った大学に通ってほしい」と回答した比率は79.3％と高く、北京の74.1％よりさらに若干高い。こうみると、母親には「学歴崇拝」のほかに「名門大学信仰」もあるようだ。その延長線上では、高校、中学校、小学校、幼児園までもその信仰の対象になってくる。実際、それも当たり前のことでもある。学歴は縦方向の比較でしかなく、横方向には名門大学と一般の大学の間の比較がある。このため、単に学歴だけでは母親の心の中の不安を取り去るには不十分なのだ。もしそれに加えて名門大学という確かなカードがあれば、母親の心に潜んでいる心配もほぼ解決できてしまうだろう。

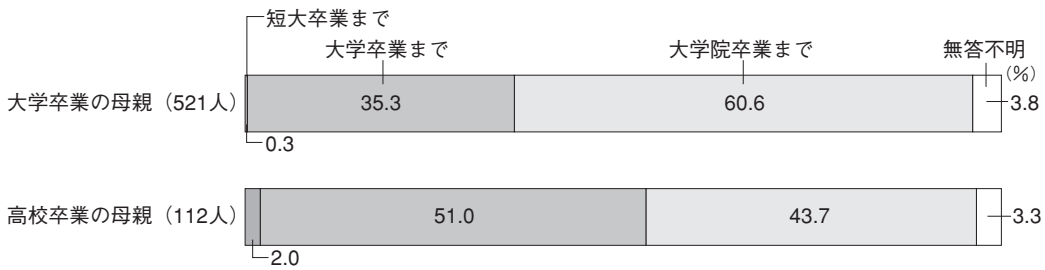
さらに子どもの性別でみると、母親の男子への学歴期待が女子よりも高いことがわかる。女子に「大学卒業まで」の学歴を望む母親は45.6％、「大学院卒業まで」を望む母親は50.４％であった。それに対し、男子に「大学卒業まで」の学歴を望む母親は32.2％だが、「大学院卒業まで」を望む母親は62.3％という高い比率であった（p.77 図２－４－１）。また母親の学歴別にみると（**図６**）、母親の学歴が高ければ高いほど、子どもの学歴に対する要望も高いようだ。子どもに大学卒業の学歴を望む比率をみると、「高校卒業の母親」は51.0％で、「大学卒業の母親」は35.3％であった。さらに、子どもに大学院卒業を望む比率は、「高校卒業の母親」43.7％、「大学卒業の母親」60.6％であった。ここにその一端がうかがえる。

４）母親の子育て意識について

私たちは、上海の母親が子育てにある程度の不安を抱いていることに気がついた（p.78 表２－５－１）。64.4％（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）の母親が「子どものことでどうしたらよいか分からなくなること」があると感じている。50.5％の母親が「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配になること」がある感じている。また「いつも子どもの安全と健康を心配していること」があると64.0％の母親が回答している（p.176 基礎集計表）。

母親の子育てに対する否定的感情がこれほど高い理由は何だろうか。上海の就学前の幼児の成長に多くの問題が実際に存在するからなのだろうか。そうかもしれないが、１つの都市において半数を超える子どもがみな成長上の問題に直面しているという可能性はとても低い。この問題の最も大きな要因は、母親自身に存在するのかもしれない。伝統的な文化と一人っ子政策の影響（本調査の結果をみると、上海では一人っ子は71.9％を占める、

■図６　子どもの進学に対する期待（上海　母親の学歴別）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

p.8 図A－3）を受けて、母親が自身の期待をただ1人のわが子に託しがちであるため、ストレスが生じやすくなると考えられる。しかも、日々激烈になる競争によって、母親は子どもがまもなく直面するであろう成長段階のプレッシャーを感じとり、悩みが深まるのである。

しかし、不安をある程度感じながらも、上海の母親は子育てに高い幸福感、満足感も示していることも確かだ。また、自分の子どもの成長を積極的に評価している。たとえば、「子育てによって自分も成長していると感じること」の比率は80.6%（「よくある」＋「ときどきある」、以下同様）であり、「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」は90.2%で、「子どもと遊ぶのはとてもおもしろいと思うこと」は91.0%である（p.176 基礎集計表）。子どもの成長に対して、満足している母親は91.3%（「とても満足している＋まあ満足している」）いる。「自分の子どもが他人の子どもより劣っている」とは思っていない（「あまりない」＋「ぜんぜんない」）母親は75.8%である（p.176 基礎集計表）。

母親の育児における幸福感や満足感は、一方では、中国の伝統思想のなかの子どもを自己の生命の延長とみなす考え方から来ている。また一方では、母親は育児の主要な担い手として、子どもの成長がもたらしてくれる楽しさをより強く感じ、達成感をより感じることができるからである。そして、母親の子どもへの積極的な評価は、ある程度、自分自身の子育てに対する肯定でもあるといえる。また、現実と照らし合わせても、今回の母親の子育て意識についての回答は比較的客観的なもののはずである。

では、これと前述した母親が抱いている育児に対する否定的感情の高さとは矛盾しないのだろうか。実は矛盾しないのである。私たちが前段で分析したように、母親の育児に対する不安はある程度自分自身の要素なのであって、子どもの成長に何らかの問題があるのではない。子どもの成長に対する積極的な評価と自分自身の育児に感じている不安は、母親の現実の状態と抱いている期待の2者の矛盾をまさに表しているのである。

（2）上海の母親に関して

1）母親の仕事

上海市婦女連合会が上海の16〜50歳の女性の就業状況に対して行った調査によれば（2005年3月4日付『第一財経日報』）、上海の女性の就業に関しては、40〜50歳の女性には、あまり問題はなくなっており、問題は主に20〜30歳の女性に集中するようになっている。研究者の分析によれば、この20〜30歳の女性が適した仕事を見つけられないのは、自身の切迫感があまり強くないことと関連しており、同時にこの年齢層の女性は考え方が比較的保守的で、安定した仕事に従事することを好み、かつ給料に対しても比較的高い要求を持っている。

そのほか、上海市婦女連合会の調査では、非正規の就業がすでに上海の女性の就業率の新たな成長点になっていることを示した。目下、非正規な就業形態にいる女性は上海の就業している女性全体の約14%を占めている。非正規就業の女性には、自営形態で融通が利く就業者（すなわち自由業や個人経営者）、大中規模の企業に雇用される臨時工・時給工・労務工（当地に戸籍を持たない）・季節工、小規模企業や零細企業に雇用される給与労働者、臨時の仕事や散発的な仕事に従事する融通が利く就業者などが含まれる。

今回の幼児の生活アンケートにおいて、上海の母親が常勤の仕事に従事する数値が思ったよりも低かった理由は、上記の調査結果から理解することができる。さらに、「高校卒業の母親」の就業状況で「専業主婦」と「フリー（在宅ワークを含む）」の割合が高かったことに対する理由もうかがえる。

注目に値するのは、常勤の仕事に従事している母親の比率と母親自身の学歴の高さが正

比例しているという点である。大学卒業の学歴を持つ母親が常勤の仕事に従事している比率は76.1%にのぼっているのに対し、「高校卒業の母親」が常勤で働いている比率は31.9%にすぎない（**図7**）。さらに、仮に常勤で働いていたとしても、週に6日以上（「週に6日」＋「週に7日」）働いている比率は、「高校卒業の母親」が33.8%であるのに対して、大学卒業の学歴を持つ母親はわずか7.8%しかいない（図表省略）。こうした実態が「高校卒業の母親」が常勤の仕事に従事するのを少なくし、「専業主婦」と「フリー（在宅ワークを含む）」を増やす原因の1つかもしれない。

2）母親の学歴と子育て

調査データをみると、母親の学歴は母親の子育てに対し重要な影響を及ぼしている。しかし、母親の学歴によって子育てに関する意識や子育てにおける行動がすべて異なっているわけではなく、時には同じこともある。

差がみられるのは、前段でみた就業状況と就業形態および、前述した習い事の選択傾向である。このほか、大学卒業の学歴を持つ母親は、子育てにおいて、子どもとの交流を増やすこと、子どもを戸外で遊ばせること、大自然と触れ合わせること、他の子どもたちと一緒に遊ばせることなどをより重視するが、「高校卒業の母親」はこれらの面での重視度は相対的に少し低いこともあげられる。また、数や文字の学習、外国語学習、芸術的な才能を伸ばすという面においては、「高校卒業の母親」の「重視する」度合いが「大学卒業の母親」を上回った。

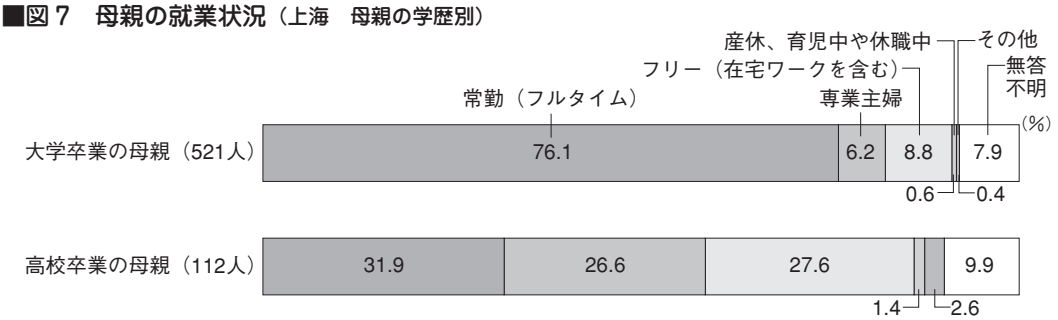
また、子どもの将来への期待の面では（**図8**）、「高校卒業の母親」は子どもが「人より抜きん出る」ことに大きな期待を寄せているが（「リーダーシップのある人」では、「高校卒業の母親」31.6%＞「大学卒業の母親」23.7%、「まわりから尊敬される人」56.4%＞41.5%）、一方、「大学卒業の母親」は、子どもの生活が快適で余裕があることにより大きな期待を抱いている（「のんびりと生きる人」では、「大学卒業の母親」15.1%＞「高校卒業の母親」11.5%）。これらを除いては、将来の経済状態への期待を含め他の多くの項目で、母親の学歴と関係なく、選択は比較的接近している。

（3）父親の育児と家事への参加状況

今回の調査結果は、第一に、上海の父親は北京の父親よりも帰宅時刻が遅いことを示した（p.87 図3－1－1）。上海の父親の帰宅時刻のピークは「18時台」から「20時台」に集中している。北京の父親の帰宅時刻のピークが「17時台」から「19時台」に集中しているので、北京は上海より丸々1時間早い。

第二に、北京の父親は上海の父親より育児と家事に参加していることがわかる。これは

■図7　母親の就業状況（上海　母親の学歴別）

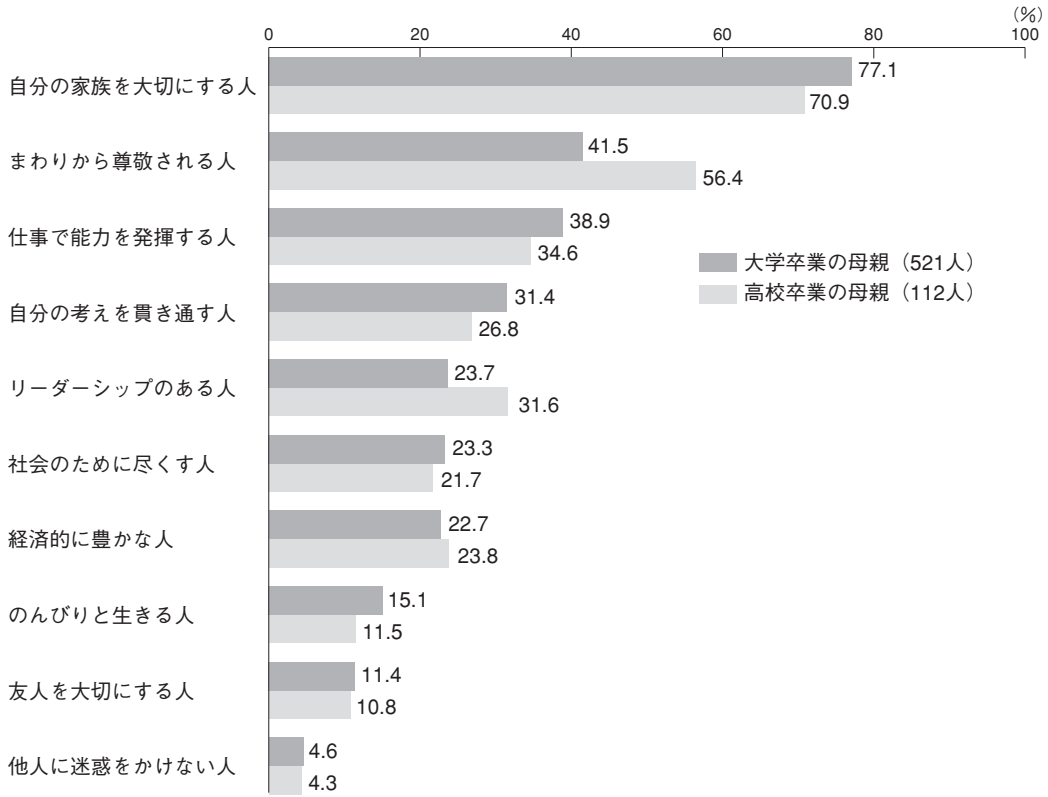


注1）母親の回答のみ分析。
注2）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

私たちが日常抱いている印象と大きな差がある。というのは、一般に中国の北地方の男性は家事への参加が少なく、それに対して、中国の南地方の男性は家庭を比較的かえりみると考えられており、北京と上海の男性はまさにそれぞれの代表だからである。だが、私たちは第一で述べた父親の帰宅時刻の結果を用いて、第二で述べた父親の育児、家事への参加状況の結果を説明してもよいのではないだろうか。

妻の立場からみれば、上海の女性は一方では夫の育児および家事参加の度合いに比較的高い満足感を抱いている（「とても満足している」＋「まあ満足している」比率は半数を超えている）。一方ではまた、彼女たちは夫にもっと育児や家事に参加してほしいと考えてもいる（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」比率は70%以上）。そして、育児と家事という２つの項目では、妻は夫に対し家事よりも育児により多く参加してほしいと考えている（97.4%）。おもしろいことに、北京の女性のほうが、夫の家事への参加により高い満足度を示している（北京57.9%、上海50.6%）。同時にまた夫の家事への参加をもっと増やすことにより高い期待を寄せているのである（北京83.8%、上海74.8%）（p.94 図３−３−１〜４）。

■図８　子どもの将来に対する期待（上海　母親の学歴別）



注１）10項目の中から、３つまで選択。
注２）母親の回答のみ分析。
注３）「大学卒業の母親」は「短期大学」「四年制大学」「大学院」を卒業した人、「高校卒業の母親」は「中学校」「高等学校」「職業高等学校」を卒業した人。

（４）子育て支援

１）子どもを預ける人とサービス

調査は、上海では母親が仕事以外で不在のとき、77.3%の子どもは父方の祖父母（母方の祖父母）あるいは親戚によって世話され、21.8%はベビーシッター・お手伝いが世話をし、15.6%は父親が世話をしていることを示した（p.101 図４－１－３）。そして、その他のサービス機関の介入はわずかであった。このようにみると、この面での地域のサービスはまだ成熟しているとはいえない。

２）幼児園への要望

上海の母親の幼児園への要望のうち、上位3位は「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」96.0%（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様）、「集団生活のルールを教えてほしい」95.9%、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」94.2%であった（p.103 図４－２－１）。「知的教育を増やしてほしい」91.4%という項目は第4位に続く。上海の母親は知的教育への要望は比較高いとはいえ、やはり「人とのかかわり」（子ども同士のかかわり、保護者同士のかかわり）や、子どもの集団生活への適応をより重要な位置においていることを説明しているのかもしれない。知的教育が重視されているのに変わりはないが、母親たちの目は子どもの行動習慣を培うことやＥＱ（こころの知能指数）を伸ばす方向などに次第に転じつつある。上海の母親の要望が比較的高い項目の中には、さらに「子育て相談ができる場所になってほしい」92.1%もある。こうみてくると、幼児園は母親に対するサポートという面で、さらなる努力をしなくてはならないようである。